街に眠る空き家を活用して、若い世代のチャレンジの場に

CASE 01 まちなかの書店をリノベーション 人の行き交う場所に

それぞれの場所に宿る思いがある

前橋市の中心市街地を流れる広瀬川は、柳並木が川風に枝を揺らす風情あるスポット。その周辺地域では近年、空き物件を利用して事業を始める人が増えてきている。〈建築設計事務所レモデザインスタジオ〉代表の木暮勇斗さんもその一人。

住宅や家具設計のほかに、「喫茶マルカ」、老舗煎餅屋「清香園」など、市街地にある店舗のリノベーションも手がけてきた。

独立を考えていたある日、広瀬川沿いの元書店だった空き物件と出会った。

日頃から「空き家ってなぜ利用されないまま増え続けるんだろう?」と疑問に感じていた木暮さんは、どう活用できるか自分で実践してみようと、思い切って物件の購入を決める。

「この建物も、使われていた当時の物が置きっぱなしだったんです。それが空き家が活用されない理由の一つ。僕らはそれを残置物と呼んでいるんですが、残置物ごと引き取るという条件でやっと動き始めました」

書店のオーナーは、思い入れのある建物を引退後も不動産屋には売らずにいた。そんな持ち主の思いと、建物の良さを残したまま使いたいという木暮さんの思いがマッチした形だ。交渉の結果、空き家となっていた隣の住宅とともに買い上げ、住宅を事務所に、店舗も自らリノベーションして、知人から紹介された個人営業のパン屋さんに貸すことにした。事務所と店舗は目下のところ内装工事中。

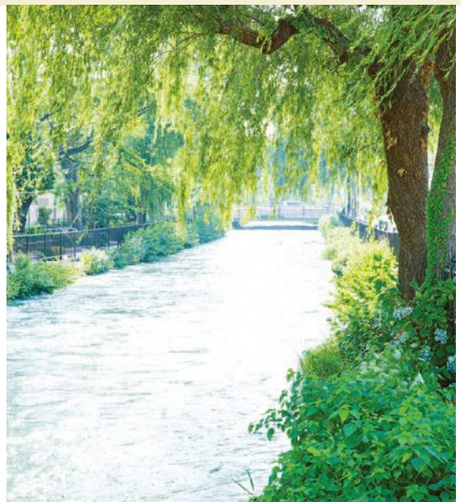
「この川沿いに事務所を構えて、隣にパン屋さんが入ることで、いろんな人が出入りするような場所になるといいなと思っています」

夏には気持ちの良い風が吹き抜ける、広瀬川沿いの散歩コースが少しずつ広がっていくのが楽しみだ。

※記事中のパン屋さんはその後「はるばん」としてオープンし、現在営業中です。(令和7年4月時点)

この人に聞いてみた!

木暮勇斗さん
llemo design studio



まちなかを流れる広瀬川・馬場川の周辺エリアは、近年整備が進み、人々の憩いの場になっている。

CASE 02 空き家に残された古道具たちを 物語とともに送り出す

ゲストハウスから古材古道具屋へ

アーケード街に佇む元衣料品店の空きビルを倉庫として使い、〈古材古道具屋 ひの芽〉を営む栗原大輔さん。富士見町で「赤城山古民家IRORI場ゲストハウス」の共同オーナーを務めたのち、新たにスタートした事業がこの「ひの芽」。旧家や空き家に眠る、使われなくなった日用品や家具、解体の際に出る古材などを引き取り、オンラインやイベントで販売している。

「IRORI場は地域に人を呼び込むきっかけ作りの場だったんですが、2年間やってみて、きっかけを持った人が入る〈住む〉器がないと気付いたんです」

空き家問題のネックになっている「残置物」に目を向けた栗原さんは、空き家や解体される家に置き去りにされた物を「捨てるのではなく、別の道が作れないか」と考え、IRORI場を卒業後、長野県諏訪市にある古材古道具のリサイクルショップ「リビルディングセンタージャパン」でスキルを学んだ。現在は不動産会社「TSUNAGU」と活動を共にし、空き家管理などの業務と連携して「ひの芽」を運営している。

「ひの芽」が扱うのは、一般家庭で使われていた日用品から、古い紡績機具、工業用品、大型家具など実に様々。栗原さんは、商品と金銭のやり取りだけではなく、元の持ち主がどんな人でどんなふうに使っていたかという、その品にまつわる物語を一緒に伝えることを大事にしているそうだ。

屋号の「ひの芽」が「日の目を見る」から来ているように、人目に触れず眠っている物たちを救い出し、その価値をわかってくれる人に渡す。またその活動を通して、空き家という場所が動き出す。理想的な循環の形がそこにある。

この人に聞いてみた!

栗原大輔さん
古材古道具屋 ひの芽

まちなかSPOT

白井屋ホテル

一時は取り壊しの危機にあった老舗ホテルが、日本を代表する建築家・藤本壮介の設計により現代的なアートホテルとして再生。街の中心地に活気を与える話題のスポット。

所在地：群馬県前橋市本町2丁目2-15

太陽の鐘

芸術家・岡本太郎による直径約 1.2m、高さ約 2.4m の巨大な鐘の作品。平成 30 年に前橋市に寄贈され、民間団体「太陽の会」との連携事業として広瀬川河畔に設置された。

所在地：群馬県前橋市千代田町5丁目18